恋のスタートライン

山菜歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋のスタートライン

【Ｎコード】
Ｎ３０１６Ｈ

【作者名】
山菜歩

【あらすじ】
高校生になるまで恋をした事のなかった主人公「勇子」。男友達の中でも特に仲のいい「香介」。休みの日に「香介の」意外な一面を見てに徐々に惹かれていくが・・・。

あたしは今まで恋をした事がない。

仲のいい男子がいても、せいぜい友達止まり。
そんな男友達のひとりに、格別に仲のいいヤツがいる。

名前は香介。
高校で同じクラスになって、意気統合した男友達のひとり。
本人曰く「女々しいんだか男らしいんだかビミョーな名前」って言ってる。
何か話し掛けやすくて、いきなり名前で呼び捨てにしちゃってたけど、本人は気にしていないみたいだから、そう呼ばせてもらっている。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

香介は、走る事が好き。
実際に陸上部に所属している。
あたし、実際に香介の練習風景を見たけど・・・。

ゴールの遥か先を見て、全力疾走する。
チーターも顔負けなんじゃないかってくらい、速くて力強い。
そんな感じがした。
それは性格にも影響していた。

ずっと先を見ていて、そこに向かって突っ走っていく。
自分の限界以上にがんばっちゃう。
成功したときはまだいいんだけど・・・失敗したら、思いっきりへこんじゃう。
ホント、不器用なやつ。
ちょっとは加減しろっつーの。

そこまではまだいいの。
何であたしがへこんだ香介のフォローに回らなきゃいけないわけ？
野郎同士でじっくり話せばいいのに・・・。

でも、まんざらじゃないのよね。
香介があたしを頼ってくれるのが、素直に嬉しい。
それだけ信頼してくれてるんだろうし・・・。
ありきたりな言葉しか返せないけど、あいつはそれで納得してくれてるみたい。
時々ケンカすることもあるけど、一晩経てばまたいつも通りに「おはよう」って仲直り。
そんな関係。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

夏休みのある日。
香介は、陸上の県大会で優勝した。
数秒単位で二番手を引き離した、ぶっちぎりの大勝利だった。
その時の香介の喜びようったら、もう半端じゃなかった。
飛び跳ね、喜びの雄叫び・・・。
あたし達が止めないと、大変なことになっていたくらいに、香介は

喜んでいた。

その夜。
香介から電話がかかってきた。
「また喜びの記者会見かな？」と思っていたら。
「明日さ、ちっと付きあってくんね？」
一緒に遊ばないか？との事だった。
あたしは軽くＯＫを出し、その日の電話は終わった。

翌日。
あたしは仰天することになる。

日曜日の午後。
待ち合わせ場所にいたのは、香介だけだったのだ。
「・・・みんなは？」
あたしは呆然としながら、香介に聞いた。
「は？俺、お前しか誘ってねえぞ？」
あたしは絶句した。
「ほら、つっ立ってねぇで行くぞ」
混乱しているあたしの手を引き、香介は歩き出した。
あたしは、呆けつつも後ろを付いていく。

今日の香介は、フード付きのノースリーブのプリントシャツに、モスグリーンのハーフパンツ。
足元には、黒のハイカットのスニーカー。
こんなコーディネートだった。

香介の私服姿って、初めて見るんだっけ。
（こんなに印象が変わるんだ）
制服姿とジャージ姿の香介しか知らないあたしにとって、とても新

鮮だった。

何て言うか・・・こいつ、おしゃれじゃん。
今まで、何かちぐはぐな感じがしてたんだけど、制服姿だったからなんだ。
これが本当に、香介「らしい」姿なんだ・・・。
それに、今更気が付いたけど・・・

あたし、香介と手をつないでるんだ。

思わず身体が強張った。
「あ？どうした？」
香介が振り向く。
「な、何でもないよ！」
何で香介を正視できないの・・・？
顔が熱い。胸がドキドキする・・・。
あたしはうつむいたまま、香介の後を付いていった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

黄色と赤のピエロで有名なファーストフード店でお昼ごはん。
その後、デパートへ。

興味がなさそうに見えていたけど、香介は服を見るのが好きみたいだった。
新作の服を片っ端から見ていく彼の表情はとても楽しそうだった。
しまいには、「これ似合うぞ」と、あたしの服のコーディネートまでする始末。

こうして一緒にいると、意外な一面がたくさん見えてくる。
そのひとつひとつを見ていく度に、どんどん香介に惹かれていく自分がいた。

「お前に見せたい所があるんだ」
腕時計から目を離すと、香介はまた私の手を引いた。
「ちょ、ちょっと！」
さすがに冷静になったあたしは、声を上げた。
「早くしろよ、時間のタイミングがシビアなんだ」
そうじゃなくて！手！手！
結局言い出せずに、あたしは香介に引きずられるようにして、歩いていった。

着いたのは、砂浜だった。
「到着」
そこから見えたのは。

真っ赤な夕焼け空。
夕日色に染まった海。
そして、少しずつ水平線に沈んでいく夕日。
美しい、一日の終わりの風景。
「うわぁ・・・」
「俺、お前にこの景色を見せたかったんだ」
感嘆の声を上げるあたしに、香介は自慢げに言った。
話している間に、夕日が完全に沈んだ。
幕を引くように、空がラベンダー色から夜色へと変わっていく。

「すごい・・・」
「ロードワークしてて、偶然見たんだ。地球ってホントに回転してるんだって実感したよ」
へへっと笑い、ふと真面目な顔になった。
「今日、お前を誘ったのはさ、学校以外での俺の事を知って欲しかったからさ」
「そ、そう・・・」
ぎこちなく頷くあたし。
「それと・・・」
一呼吸置いて。
「俺の気持ちも、お前に知って欲しかったんだ」
「え？」
私は目を見張る。
「俺さ、お前好きだよ」
・・・あまりにも突然すぎて、思考が停止する。
「何だかんだで、いつも俺をフォローしてくれてさ。ありがたいって思ってんだぜ？
なんつーかさ、俺、鉄砲玉みてぇなヤツだろ？」
それは確かに否定しない。
でも、言葉にできない。声が出ない。
仕方なく、私は頷いた。
「だからさ、俺の側にいてほしいっつーか・・・ブレーキ役でいてほしいっつーか・・・俺と付き合ってほしいんだ」
香介の告白に。
あたしは涙を流して頷く事しかできなかった。
「ＯＫって受け取っていいんだな」
あたしは何度も頷く。
「サンキューな。『勇子』」
そう言うと、香介はあたしの頭を撫でたのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊
―＊―＊―＊―＊

付きあい始めたはいいけど・・・。
あたしは初恋。
右も左もわからない。
思っている事が伝わらなくて衝突するなんて事はザラ。
でも、今日は一段とド派手なケンカをしてしまった。

それは香介とのデートの時、待ち合わせの駅を間違えていることに気づかず（似たような名前の駅だったの）、待ちぼうけを食わされた私は、香介を責めてしまったのだった。
冷静に考えれば、香介の方が正しくて、携帯を忘れた上に勘違いしていたあたしが完全に悪いんだけど・・・。
引くに引けず、今香介と断絶状態になっている。

「おねーちゃーん・・・」
「ん？どしたの？」
タバコをくわえながら、姉が振り向く。
あたしは困った事があると、大体は姉に相談する。
あたしはこれまでの顛末を全て話した。
「・・・ふーん。それはあんたが悪い」
「う・・・だよね」
私は肩をすぼめた。
「だったらさっさと香介君に謝んな」
「・・・うん」
私は姉の部屋を後にしようとしたが・・・。
「勇子」
姉が呼び止めた。私は姉の方を振り向く。

「頑張んなさい。自分の気持ちに正直にね」
あたしは黙って肯いた。

何だか楽になった気がした。

―＊―

こーすけ
件名：ごめんね
本文：
あたしが悪かった。
本当にごめんなさい。

こんな事、言い訳にしかならないけど・・・
あたし、初めてなんだ。
男の子を好きになったの。
友達の間が長かったから、分かりきってると思っていて、うまく伝わらなかったのが悔しくてつい口をついちゃって・・・。
本当にごめんなさい。

正直あたし、こーすけとどう接してたらいいか、わからなくなっちゃったよ・・・。

―＊―

送信ボタンを押す。

やっと、メールを送れた。
裕に３０分の時間が経っていた。

その日、返事は来なかった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊
―＊―＊―＊―＊

翌日・登校日。
何とも重たい気分で登校した。
香介とは同じクラスだ。嫌でも会わなきゃいけない。
どうしよう、気まずいよー・・・。
足取りも重くなる。

近道である路地裏に差しかかった時。
「ひゃ！」
何かにつまづき、私は転びそうになる。
何とか踏みとどまって、振り向くと・・・
「香介・・・」
香介が電柱に寄りかかっていた。
「何ぼさっとしてんだよ。寝ボケてんのか？」
一気に頭に血が上った。
「う、うっさいわね。寝ボケてなんかないわよ！大体メールの返事もよこさないで・・・」
「直接口で言いたかったんだよ」
あたしの言葉をさえぎり、香介が口を開く。
あたしは口を閉じた。
「俺だって女の子と付き合うのは初めてだぞ？」
「うそでしょ・・・」

私は驚いた。
だって香介、部活とかで、いろんな女子から声かけられてたんだよ。
「嘘じゃねえよ。お互い初めて同士なんじゃん。かえって俺、安心したよ」
そう言うと、香介はあたしを抱きしめた。
「カレカノだろうが、友達だろうが、付きあい方なんて変わんねーと俺は思うんだけどなぁ」
・・・
あたし、考えすぎてたのかな？
恋人になると、何か友達とは違う「何か」になるとか・・・。
「そっか。今まで通りでいいんだ・・・」
「そーだよ。それと、俺も悪かったよ。ごめんな」
香介の言葉と温もり。
香介は悪くないのに。

腕の中で、あたしは恥ずかしくって、嬉しくって、ちょっと胸が痛くって・・・すごく優しい気持ちになれた。
「ばか」
口ではそう言ったけど、あたしだって感謝してるんだからね。

人を好きになる事の喜び。
あたしに「優しくなれる心がある」って知れたこと。
じんわりとした、温かくて深い想い。

みんな香介が教えてくれたんだもん。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

右も左もわからないけど。
香介と一緒なら、未知の世界を歩いていけそうな気がする。
迷っても、手さぐりで進んでいけばいい。
初めてなんだから、わからなくて当然だもんね。

でも、ひとつだけ変わらない事。
香介が、何かにつまづいてへこんだ時は、絶対にあたしが守るから。

この事をはっきりと言えるようになるには、もう少しの月日を必要としたんだけど・・・。

恋のスタートラインに、あたし達は今立ったのだった。

（後書き）

「恋のスタートライン」。最後までお読み頂きありがとうございました。

「高校生の恋」を扱った作品作りに挑戦してみました。

私こと「山菜歩」が恋愛系の創作をするとなると、実話系が多かったりします。

あんまり、「夢のある恋物語」を書くことが出来ないんです。

そういう意味でも挑戦だったのですが・・・。

これは本当に作るのが大変でした。

いかがでしたでしょうか？

ご意見・ご感想がございましたら、是非是非お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3016h/

恋のスタートライン

2010年12月18日13時59分発行